

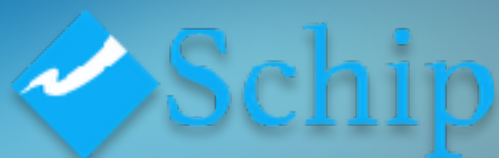
東大現代文完全解説

Anchor

平成26年度 第一問 第四問

収録

ver. 1.0.0



Anchorについて	3
Anchorに関するお問い合わせ	4
平成26年度.....	5
第1問.....	5
本文解説.....	5
設問解説.....	5
設問（一）	6
設問（二）	9
設問（三）	12
設問（四）	17
設問（五）	20
第四問	27
本文解説	27
本文解説	28
設問（一）	28
設問（二）	32
設問（三）	36
設問（四）	42

Anchorについて

＜虎の巻＞の重要性

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、＜虎の巻＞と＜各年度問題解説＞から成り立っている。＜虎の巻＞では、各年度の問題に共通して通用する方法論について説明している。＜各年度問題解説＞では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り＜各年度問題解説＞のみを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ虎の巻を参照してから、そして参照しながら、＜各年度問題解説＞を読むようにしてほしい。当たり前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とするかが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というものは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてその教材の内容について議論することとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。また、文章内を根拠にしたとしても、論理性を欠いてもいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様では

あるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

Anchorに関するお問い合わせ

Anchorに関するお問い合わせは、Webサイト、Twitter、LINE@にてお受けしております。

- ▶ Schip 公式Webサイト <https://schip.me>
- ▶ Twitter @schip__ https://twitter.com/schip__
- ▶ LINE@は以下のQRコードより友達登録をお願いします。



▶

平成26年度

第1問

藤山直樹『落語の国の精神分析』

本文解説

この文章は典型的な二次元型の論説文だと言えるだろう（「二次元型」とは何かについては虎の巻を参照して欲しい）。全体を通じて「落語」と「精神分析」が並列して説明され、様々な視点からその二つの類似点が述べられている。その視点となるテーマは主に「分裂」についてである。縦軸にテーマ、横軸に落語と精神分析（とその共通の記述）を取って、表形式で本文の引用をまとめてみた。これを読めば全体像が掴めるだろう。あとは各設問ごとに詳細な内容を解説したい。

項目	落語・精神分析 共通の記述	落語	精神分析
出典的な価値①		【第1段落】 『落語家協会を以って「落し」を世に広げよう」との志を抱き、やがて落語は、この一門で栄える。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』	【第1段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』
強力性	【第2段落】 『多くの落語家のなかで、その落語の技を、きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』	【第2段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』	【第2段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』
三つ折な道徳性	【第3段落】 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』	【第3段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』	【第3段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』
経済的効果性 プレゼンター	【第4段落】 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』	【第4段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』	【第4段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』
読者を相手にしている	【第5段落】 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』	【第5段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』	【第5段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』
同列展開	【第6段落】 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』	【第6段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』	【第6段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』
自己分裂する性を享受する	【第7段落】 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』 『きき手から受け取る。』	【第7段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』	【第7段落】 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』 『落語家は世に栄えるものだし、みんな同じ落語の技を思っている。』

設問解説

設問（一）

問題	「このころを凍らせるような孤独」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	精神分析家も落語家も、独力で成果を出すことが求められ、その成果の責任もまた残酷にも全て自身で引き受けなければならないということ。（63字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ この問いについてどのように答えればいいのか？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「この」が指す内容は何か？・ 「このころを凍らせるような孤独」の性質は何か？ <p>表現フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「このころを凍らせる」という比喻について考えよう。

構成フェーズ

本問は「このころを凍らせるようような孤独」とは「どういうことか？」と問うてきている。「どういうことか？」と聞かれているのだから、「このころを凍らせるような孤独」というものを本文に照らして筆者の言わんとする内容を捉えて、より説明的な形で書けばいいだろう。つまり、「この」は一体何を指しているのか、そして「このころを凍らせるような」とは一体どういうことなのかを本文で筆者が主張していることを踏まえた上で説明すればよい。つまり、このが指す内容を確定した上で、「このころを凍らせるような孤独」がどういうことかを書けばいい。

読解フェーズ

「この」が指す内容は何か？まず、「この」という指示語が指すものを確認したい。「この」であるからには直前を見れば良いので、指されている内容は「彼らは自分をゆすぶるほど大きなものの前で～客が来なくなる。患者が来なくなる。」の部分であることがわかる。この文章は最初の二つの形式段落で詳しく述べられていた「圧倒的な孤独」についてのまとめの文章である。ということはつまり、この設問もまた、最初の二つの形式段落で詳しく述べられていた「圧倒的な孤独」についてまとめれば良いということになる。この「圧倒的」という表現が、ちょうど傍

線部の「こころを凍らせるような孤独」と対応している。答案の構成は「落語家も精神分析家も『圧倒的な孤独』の中にあるということ。」で決まりだ。

「圧倒的な孤独」とはどういうことか。

筆者は落語家と精神分析家の孤独について一人で観客や患者に向き合わなければならない孤独と結果を他人のせいにできず全て自分が引き受けなければならない孤独という二つの点から類比している。この二つの孤独が「こころを凍らせる」。誰もあてにできない、だからこそ誰のせいにもできない、あらゆる点で一人であることを強要される落語家の仕事と分析家の仕事。「自分を揺すぶるほど大きなものの前でたった一人で事態に向き合い、そこを生き残り、なお何らかの成果を生み出すことが要求され」そしてそれに失敗することは「自分の人生を脅かす」ことを意味するのである。こうした孤独の感覚がこころを凍らせてしまうかのように感じる。

ここで凍るという言葉のニュアンスを考えてさらに一步踏み込んで行こう。凍るとは物事が動かなくなることを意味する。こころを凍らせるような孤独とは、その圧倒的な孤独ゆえにこころが動かなくなる。つまり、圧倒的な孤独の前に押しつぶされ、極度の緊張の中で、こころが張り詰めてしまい、身動きが取れなくなってしまう。圧倒的な孤独に対処できなかった時のことを考えるとぞっとしてしまう。そしてもし失敗してしまったら、確実に自分の人生が脅かされる。失職するかもしれないという不安だ。

コラム：比喻について

比喻とは、感覚的に分かりやすいイメージを用いることで、論理的にだけではなく読み手の感情やイメージに訴えかけることで、効果的に意味の伝達を図りたい時に使うことが多い。

アリストテレスは、メタファー（隠喩と訳す場合が多い）を幾つかの役割に分類する。まず、謎解きである。あえて直接的な言い方を避けて謎めかすことで、その謎が解けたときに人々は快を感じるんだと述べている。

次に先ほど述べたような効果的に意味を伝えること、そして文章のあるいは言語の新たな地平を築くことでもある。

これは、新しい表現をすることの斬新さである。新たな表現を獲得することによって人間の認知は新たな地平を切り開くこともある。今まで意識にのぼっていなかったものが昇るようになる。今まで結びつかなかったことが結びつくようになる。メタファーはこのような役割があったりするのだ。

メタファーには特別注意してそれが表そうとしていることをじっくり考えて、謎を解く時間があってもいいかもしれない。

まとめると、独力で患者や観衆に向きわなければならないこと、そして演技や診断を失敗したら確実に人生が脅かされるという不安という二点を書けばいい。

他社解答例

赤本

答案	落語家も分析家もたった一人で観衆や患者の期待にさらされ、成果を出さなければ自分の人生が脅かされてしまうこと。(54字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

回答に必要な要素が過不足なく含まれているとともに、一読して読みやすい優れた答案だ。

東大の現代文25カ年

答案	落語家も分析家も、失敗すれば自分の人生を揺るがしかねないほどの他者の大きな期待に、ひとりで向き合い成果を出せねばならないこと。(63字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

この答案もまた、必要な要素を盛り込みつつ、読みやすい回答になっている。

駿台（青本）

答案	落語家も分析家も、文化を内在化し自己の存在を賭けて、相手の期待に応えようとただ一人で他者と対峙するしかないということ。(59字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「文化を内在化し自己の存在を賭けて」という文章がよくわからない。よって表現点の加点はない。また、この答案に必要な要素は、独力でという点と人生を揺るがしかねない結果も引き受ける必要があるという二つの点が必要だが、この回答は一つしか書かれていない。よって読解点さらには関連して構成点を減点した。

河合

答案	反応の予想できない他者の目にさらされ、その期待にこたえる責任をただ一人で引き受けることが自己の存在理由となっているということ。(63字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

「自己の存在理由となっているということ」と結んでしまっはすべてがダメであろう。「心を凍らせるような孤独」とはどういうことか？と問題は聞いているのである。存在理由とは、自

分が「いま・ここ」に存在していることの理由あるいは根拠である。心を凍らせるような孤独は、自己の存在理由なのだろうか？この問いは聞かれていることに答えていないことは明らかである。

東進ハイスクール

答案	落語家と分析家に共通する、大きな期待を抱いて対価を支払う人にただ一人で対峙して成果を要求され、もし失敗すれば自己の人生を確実に脅かされる状況のもたらす思い。(78字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：-1点

回答に含めるべき要素は盛り込んではあるものの、多少の読みにくさがある。一読してわかりにくいような答案は避けたほうが無難だろう。

スタディサプリ（旺文社）

答案	落語家も分析家も、他者の期待にこたえられなければ自分の存在意義が問われる過酷な関係性の場に、ただ一人で向き合わなければならないこと。(66字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

存在意義が問われるというのは言い過ぎだろう。「人生を脅かされる」とは言っているが、それは職業的な問題であり、存在意義までが脅かされるとまで言ってしまったら言い過ぎである。存在意義とは、「自分が存在していることの意味」程度に理解していいだろう。確かに、職業的なアイデンティティが個人の存在意義に関わっている人もいるだろう。しかし、筆者が分析家という職業に個人的なアイデンティティまでかけているとまでは読み取ることができない。よってこの回答は言い過ぎである。そのため読解点は減点した。

設問（二）

問題	「落語家の自己は互いに他者性を帯びた何人もの他者たちによって占められ、分裂する」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	落語家の中には複数の登場人物の独立した人格が同居しており、かつ、その複数の他者を演じ分けるということ。(65字)

構成フェーズ

- ・ 傍線部は、どのように分解できるか？

読解フェーズ

- ・ 「他者性を帯びた何人もの他者」とはなにか？
- ・ 「落語家の自己」が「他者性を帯びた何人もの他者」によって「占められる」とは、どういうことか？
- ・ 「落語家の自己」が「分裂する」とは、どういうことか？

思考の目次

表現フェーズ

構成フェーズ

傍線部自体が、普通に意味の通った文章であるので、回答として求められるのは、それぞれの要素を詳しく言い換えることだと言えよう。よって、構成は傍線部を元にすれば良い。言い換えるべき要素は以下だ。

- ・ 「他者性を帯びた何人もの他者」とはなにか？
- ・ 「落語家の自己」が「他者性を帯びた何人もの他者」によって「占められる」とは、どういうことか？
- ・ 「落語家の自己」が「分裂する」とは、どういうことか？

読解フェーズ

「他者性を帯びた何人もの他者」とはなにか？要素の中で若干わかりづらいのは、「他者性を帯びた何人もの他者」の箇所だろうか？「他者なんだから他者性を帯びているに決まっているだろ！」というツッコミが入りそうだが、我慢してみよう。傍線部の直前の文章で「この他者性を演者が～」と書いてある。よって、指示語をたどり、この「この」が指す先も見てみよう。そこには「おたがいがおたがいの意図を知らない複数の他者としてその人物(登場人物)たちがそこに現れなければならない」とある。つまり、この「他者性を帯びた」とは、たがいに別の人格を持った他者同士であるということを強調している表現なのだということがわかるだろう。落語家の中に“他者たち”は一緒に存在しているが、それらの人格は相互に独立でなければいけない（ということを手早く落語家は表現しなければいけない）ということだ。つまり、落語家の中には独立した複数の他者が同居しているのだ。これが、「他者性を帯びた何人もの他者」によって占められるということの意味である。では、「分裂する」とはどういうことだろうか。落語家は、自

分のうちに複数の他者を同居させている。しかしそのことだけでは、落語はできない。その同居した複数の他者を、演じ分けなければ落語は成立しないのである。つまり、うちにいる複数の他者を、声色を変えたり、仕草を変えたりすることによって、観客の目にもわかるように演じ分けることによって、落語は成立するということである。ここまでまとめれば、回答は完成である。

他社解答例

赤本

答案	落語家はお互いの意図を知らない複数の登場人物を演じ分けて、それぞれの人物をリアルに現れさせるということ。(52字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

「占められ」という点を書いていないために読解点を一点減点したが、よくできている回答である。

東大の現代文25カ年

答案	落語家は根多を話者の視点で語るのではなく、互いの意図を知らない複数の登場人物に瞬間瞬間に同一化し演じ分けるということ。(59字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

赤本と同様に、「占められ」という点が出ていないために、一点減点した。

駿台（青本）

答案	落語家は演じる自分を観客という他者の視点から対象化した上で、互いに自律した複数の他者の生きた対話を演じるということ。(58字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

前半の要素がここで必要かは疑問である。間違いではないが、「占められ」という点を書いた方がよかっただろう。よって読解点を減点した。

河合

答案	臨場感をもって根多を演じる落語家は、語り手としての自己を消去し、互いに意図を知らない登場人物の各々にそのつど成りきって生きるということ。(68字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

語り手としての自己を消去しているのだろうか疑問である。「落語家は講談のように話者としての視点で語るのではなく」とは言っているが、それを「語り手としての自己を消去している」と捉えるには論理の飛躍がある。よってここでは、言い過ぎである。そのため読解点を減点した。

東進ハイスクール

答案	ひとり芝居を行う落語家の内部では、彼が瞬間瞬間に同一化するネタのなかの登場人物が、互いに互いの意図を知らない複数の他者として現れているということ。(73字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

内部の複数の他者が、演じ分けることによって、外部にも現れてくることが、「占められ、分裂する」ということの意味である。そのために、この回答は読解点を一点減点した。

スタディサプリ (旺文社)

答案	落語家は、観客という他者の視点から自己を客観視した上で、落語に登場する相互に独立した複数の他者全てに同一化しつつ一人で演じる存在であること。(70字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「観客という他者の視点から自己を客観視した上で」というのはこの回答においては、余計なものなのではないかと思う。確かに落語家は観客という他者の視点から自己を客観視しているという趣旨の説明はなされている。しかしそれは、異なる次元の分裂であると説明されている。ここではその次元の分裂について述べる問いではないので、この要素は余計であろう。そのために読解点を減点した。また、設問は、「～占められ、分裂する」とはどういうことかと聞いてきているので、「落語家は～存在であること」という回答は適当でないと考えた。そこで、構成点も一点減点とした。

設問 (三)

問題	「ひとまとまりの「私」というある種の錯覚」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
解答例	本来人間は各々自律的な複数の自己に分裂しているが、それらの相互交流の中で、事後的に統一的な自己の存在が作り上げられるということ。(64字)

構成フェーズ

- ・ 回答の構成を考えよう。

読解フェーズ

思考の目次

- ・ 「私」とかっこでくくられている意味を考えよう。
- ・ 錯覚とは具体的にはどういうことだろうか？

表現フェーズ

- ・ ひとまとまりの「私」を言い換えるとどうなるだろう？

構成フェーズ

解答の構成は設問を見るだけで決まる。設問を一言で言えば、「錯覚」について詳しく説明しろということなのだから、回答は基本的には「本当はAなのに、Bであると私たち人間には感じられてしまうということ」という形になるだろう。そしてBは「ひとまとまりの『私』」であるので、回答の骨子は以下になるだろう。

「本当はAなのに、〈ひとまとまりの『私』〉であると私たち人間には感じられてしまうということ。」

読解フェーズ

まずは「ひとまとまりの『私』」という記述の意味を確認したい。ここでのポイントは、「私」が鉤括弧でくくられている点だ。筆者が「」を使うときは、その言葉を強調することを目的としている。どのように強調しているかは、文脈にもよるが、一般的な使われ方とは異なる意味で使う場合、あるいは逆に”いわゆる～”ということを表すために使われたりする。

この文章では、筆者は「人間が本質的に分裂していることが精神分析の基本的な前提だ」と言っている。しかし、「一般的」には、人間が分裂しているなどとは思われていない。筆者は精神分析ではそうは考えないと言っている。だからこそ、ここで私ではなく「私」として、読者に「一般的」な用法とは異なる意味であることを了解させている。

繰り返すが、人間の本質的なあり方は「分裂」だと筆者は述べる。そして、その分裂している、いわば一個体の人間の中に宿る複数の自己は、自律していると述べている。まるで、落語家が複数の自律的な他者を演じるように。

自律というのは、自らが自らの行動規範を設定することができるという意味である。すなわち、どれかがどれかに依存しているのではなく、それ自身として一つの体系・システムを持っているようなものである。この点もまた回答する上では重要な要素であろう。

余談になるかもしれないが、錯覚はいかにして生まれるのかについても考えていきたい。

筆者は、精神分析の前提は人間は本来的に分裂していることにあるという。その分裂は、意識と無意識、自我と超自我とエス、精神部分と非精神部分、本当の自分と偽りの自分などである。

これらは、自律的な複数の自己である。つまり、その一つ一つが「自己」でありうるのだ。人間はその複数の自己によって形成されている。それらの対話と交流の中に、「ひとまとまりの『私』というある種の錯覚が生成される」と筆者はいう。ひとまとまりの「私」は、ある意味では“作られた”概念だということである。しかしながら筆者は“作られた”概念であるからといって、否定しているわけではないことにも注意しよう。私たちは、みんな、ひとまとまりの「私」を錯覚してしまうのだ。しかしそれは事後的なものである。本来は分裂しているのだが、それらの相互交流の中で、いつの間にか「ひとまとまりの『私』」が作り上げられるのだ。おそらくこれは意識的な行為ではないだろう。そういう意味では我々はみんな錯覚してしまうのだ。そしてその錯覚を錯覚だと思えなくなってしまった状態が精神分析を受けに来る患者なのだろう。自己の本来的な分裂に気づいてしまいながらも、ひとまとまりの「私」という錯覚からも抜け出せないで苦しんでしまう。分析家は、そうした患者の分裂のあり方に自己を同化させつつも、外部の視点からその分裂を見通す。そこで、再び自己の統一が回復されるのである。しかし今回は、錯覚ではなく、自覚的な営みとして。これが本文を読む上で基本的な図式であると言ってもいいだろう。簡単にまとめると、この文章によれば、以下の三種類の状態の人間が考えうるということである。

1. “普通”の人＝ひとまとまりの「私」があると錯覚している人。
2. 精神分析の患者＝自己の分裂に気づくも分裂した自己に振り回されて悩む人。
3. 精神分析家＝自己内部の分裂を外部の視点から相対化した上で、自律的なひとりの人間としてのあり方を回復した人。

本題にもどらう。ここまでをまとめると回答は以下のようなものが考えられるだろう。

人間は本来的に分裂しており、複数の自律的な人格を持っている。しかし、それらの相互交流の中でひとまとまりの「私」は作り上げられる。

最後に、ひとまとまりの「私」を言い換えれば、回答が完成する。ひとまとまりの「私」とは、意識と無意識、自我と超自我とエス、精神部分と非精神部分、本当の自分と偽りの自分などの分裂した自己が、統一的な自己のうちに統合されているような状態のことである。その統一的な自

己はあくまでも事後的なものである。なぜなら、「人間は本来的には分裂している」というのが精神分析の基本的な前提だからである。

以上をまとめると、回答例のようになる。

本来人間は各々自律的な複数の自己に分裂しているが、それらの相互交流の中で、事後的に統一的な自己の存在が作り上げられるということ。(64字)

他社解答例

赤本

答案	人間は本来的には自律的な複数の自己より成るが、それらを総括する自我があると思っているということ。(48字)
Schip採点	読解点：2点 構成点：1点 表現点：1点

錯覚というニュアンスをもっと出してもよいのではないかと思う。思っていることよりも、思い込んでいるなどにした方がベターだと思われる。多少厳しいかもしれないが、そのことを考慮して構成点を一点減点した。

東大の現代文25カ年

答案	人間は本来、自律的に作動する複数の自己を内部に持つのだが、自ら統合された一つの人格を持った主体とみなしていること。(57字)
Schip採点	読解点：5点 構成点：2点 表現点：1点

この答案はよくできた回答である。

駿台（青本）

答案	人間は、本質的に分裂した異質な自己の関わり合う自らの存在を、個としての統合性をもつ主体と見なして生きているということ。(59字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

この答案もよくできている。

河合

答案	人間は自律的に作動する複数の自己に分裂した存在だが、それらの関わり合いの総体を、統一性をもつ人格として感じることができるということ。(66字)
Schip採点	1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

錯覚とあるのだから、「本当はそうでないのにそう思っている」というような書き方が求められる。ここでは、精神分析においては「人間が本質的に分裂してること」が前提にされていると書かれている。ということは、ここではそのことをうまく説明しなければならないが、本答案はそこが曖昧である。「本来は～」などの要素が必要であろう。また、「感じることができる」と言ってしまうのは、「感じていない」という状態も存在し得るということを含意してしまう。そうではない。この錯覚は、あくまで人間誰しも必ずそうは感じてしまうものなのだ。以上の根拠により、この回答には読解点は与えられない。

東進ハイスクール

答案	人間は本質的に分裂し、内部には自律的に作動する複数の自己が存在するにもかかわらず、現実世界ではそれらは統括されて自律的な一人格をなしているという思い込み(のこと)。(79or82字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：-1点

現実世界とはなんだろうか？「現実世界では」とするからには、現実世界でない何か、例えば「仮想世界」が別に想定されるべきだということなのだろうか、あるいは回答中にある「内部」が「現実世界」に対応する概念なのだろうか。いずれにせよ、本文では、現実世界やそれに対応する何かについては述べられていない。こうしたツッコミに対してこの回答は弱いのではないかと思う。そのために読解点を減点した。また、字数が多すぎるので、表現点を-1点とした。

スタディサプリ(旺文社)

答案	人間は、本質的に複数の異質な自己の集合体でしかない自らの存在を、一貫性をも個的人格であるかのようにみなして生きるほかないということ。(66字)
Schip採点	0点 読解点：0点 構成点：0点 表現点：0点

「生きるほかない」というのは、本文に書いていないし、それならば分析家の仕事は無意味なのではないかと思うが、「ほかない」というのは言い過ぎである上に、そのようなことは書いていない。生きるほかないとなってしまうと、これは惜しいどころではなく明確に誤答と言わざるをえないだろう。

設問（四）

問題	「精神分析家の仕事も実は分裂に彩られている」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	落語家と同様、精神分析家も、自己内部における分裂を経験するが、その一方で自分を外から眺めるという次元でも分裂するということ。（63字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 回答の方向性を考えよう <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「精神分析家の仕事も～」における”も”に注目しよう。・ 彩られているとはどういうことか考えてみよう。

構成フェーズ

傍線部の意味をきちんと読み取って、その趣旨に沿って具体的にどういうことを説明していけばいい。傍線部を見てみると精神分析家の仕事「も」と書いているので、精神分析かと落語家の仕事を比較していることがわかる。よって、回答の大まかな方向は以下のようなになる。

落語家と同様に精神分析家も、実は分裂に彩られているということ。

読解フェーズ

ここでは、「精神分析家の仕事も分裂に彩られている」ということが、具体的にどういうことなのかを考えていけばいい。

上記で述べたように、精神分析家の仕事“も”と書いてあるので、ここでは同様に分裂に彩られた仕事としての落語家との比較がなされているということがわかる。

では落語家の仕事かどのようなものかを考えていこう。設問(3)でも述べたように、落語は一人の人間のうちに様々な他者を取り込み、その他者同士を会話させて生き生きとしたリアリティを聴衆の前に提示する。しかし、落語家は完全に分裂しているのだろうか。いやそうではない。

それは世阿弥の「離見の見」という文中の言葉からも理解できる。「演じている自分」と「それを見る自分」にも落語家は分裂しているのだ。つまり、「演じている自分」は複数の他者を演じることで分裂しているが、さらにその演じている自分を見ている別の次元の分裂があるということも述べている。

落語家は複数の次元で分裂しているのである。一つは複数の他者を演じているという分裂、もう一つはその演じている自分を見つめるという分裂なのである。落語家はこのように二つの次元で分裂に「彩られている」のである。

では、精神分析家はどのような分裂に彩られているのだろうか。分析家も落語家と同じ二つの次元に分裂している。

一つは、「患者の一部分になることを通して」の分裂（第四段落目一行目）である。具体的な例は本文に書いてあるのでゆっくり読んでもらいたい。しかし、そうした分裂だけでは分析家の仕事はできない。それを“離れた”視点から見て、自分の中に取り込まれた患者のことを分析しなければならないのである。（第五段落）

これは落語家の二つに次元と重なる分裂のあり方ではないだろうか？

彩りは単色ではありえない、ステーキの付け合わせも黄色と赤のパプリカが添えられていた方が彩り鮮やかである。

分析家も同様に、複数の分裂によって「彩られている」のである。

まとめると回答のようになるだろう。

落語家と同様、精神分析家も、自己内部における分裂を経験するが、その一方で自分を外から眺めるという次元でも分裂するということ。（63字）

他社解答例

赤本

答案	分析家は患者の心に住む複数の自己に同一化しつつも、分析家の視点に戻ってその世界を理解し伝えるということ。（52字）
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「分析家の視点で理解し伝える」とは誰に伝えるかを明示しなければ文章が成立していないと言ってもいいだろう。ここでは患者に伝えるということなのだろうが、傍線部は「分裂に彩られている」とあって、それについてどういうことか答えよとされているので、患者に伝えること

まで含める必要ないだろう。また落語家同様という要素はあった方がベターである。そのため構成点、読解点共に1点ずつ減点した。

東大の現代文25カ年

答案	精神分析家は精神分析の際、患者を理解するために患者の自己の複数の部分に同時になってしまうので、自己が分裂すること。 (60字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

この答案も一つの次元の分裂しか書いていない。彩られているという言葉の持つニュアンスと文章中においても落語家の二つの次元の分裂と分析家の二つの次元の分裂が対応した形で述べられていることを考えても、二つの次元の分裂について述べたほうがいいだろう。彩りを言い換えられていない点で構成点を一点、二つの次元の分裂について触れていない点で読解点を1点ずつ減点した。

駿台（青本）

答案	分析家が患者の世界を理解し助言するには、患者の分裂した複数の自己に同化し自らも分裂を体験するしかないということ。 (56字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：1点

一つの次元の分裂しか書いていないので、読解点を減点した。それに伴い、彩られているという傍線部を読み解けていないことになるので、構成点も一点減点した。

河合塾

答案	分析家が患者を理解するさいには、患者の分裂した複数の部分になりきりつつも、そうした事態を分析家自身の視点で把握しているということ。 (65字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

「精神分析家の仕事も」と傍線部にあるので、落語家という単語をどこかで用いるのが良い。そこで構成点を一点減点としたが、二つの次元の分裂を書いているため優れた答案である。

東進ハイスクール

答案	落語家同様分析家も、患者の精神分析状況において具現化される患者のこころの世界を構成する複数の部分に同時に同化して生じた複数の自己で内部を占められるということ。 (79字)
Schip採点	1点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：-1点

やはり読みにくいというのがまずはじめにある。この文章は、一読して文章の構造がはっきりしない。こういう答案は読み手にとってはストレスなので、受験生のみんなは気をつけよう。難しい言葉を使う必要はない。わかりやすい文章を書くことを心がけよう。79字という長文になっていることを考えると、表現点は減点が適当だ。またこの答案は、一つの次元における分裂に関してしか言及していない。そのため読解点も減点である。

スタディサプリ（旺文社）

答案	患者という他者になりきることでその心的世界を理解しようとする精神分析家は、患者の自己の複数性に同化して自らも分裂した存在となること。（66字）
Schip採点	1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

これもまた一次元の分裂しか書いていない。読解点が0点なのは、落語家についての言及がないことと、一次元の分裂しか書いていないからである。

設問（五）

問題	「生きた人間としての分析家自身のあり方こそが、患者に希望を与えてもいる」（傍線部オ）とあるが、なぜそういえるのか、落語家との共通性にふれながら一〇〇字以上一二〇文字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。
解答例	落語の観客が演者の中に同居する登場人物の諸人格の対話を楽しむのと同様、精神分析においては、自身の中で無意識に交錯する複数の自己に苦しむ患者は、その分裂を俯瞰的に説明する分析家の姿に、一つの人格に統合された人間という可能性を見出すから。（117字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 落語家との共通性にふれながらという点に注意しよう ・ なぜそう言えるのかとあるので理由を答えよう <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生きた人間としての分析家のあり方とは？ ・ そうしたあり方はどのような点で落語家と共通しているのだろうか？ ・ 患者に希望を与えているとはどういうことか？

構成フェーズ

落語家との共通性にふれながらという指示があるので、落語家と精神分析家の共通する点でどこを盛り込めばいいのかを考えて文章の構成を考えていこう。

また、なぜそう言えるのかという問いかけになっている。傍線部オということが言える理由を答えていけばいい。「生きた人間としての分析家のあり方が、患者の希望を与える」と言えるのはなぜかである。そう言える根拠を書いていけば答えになるだろう。

読解フェーズ

まず「生きた人間としての分析家のあり方」とはどういうことか考えていこう。直前には「分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点から見ることができる」と書いてある。この言葉は手がかりにすべきであろう。「分裂から一瞬立ち直って自分を別の視点から見る」とは、あの「離見の見」の事である。これは、直前の設問(四)で回答したことと重なり合う。

では、このような精神分析家のあり方と落語家の共通性はどこにあるだろうか。落語家は昨日笑わせたそのままのネタを繰り返すのではなく、常に観客側からの視線で演じている自分を見つめ、自らで自らを評価する（第五段落）。それは自分と自分の対話なのである。ここに一つ目の「生きた」という側面が現れる。分析家も同様に、自らを別の視点で見ることによって自らと対話を行う。

問4でも述べたように、落語家と分析家の分裂はそれだけではない。両者ともに、演じている-分析している内部においても分裂しているのであった。筆者は落語を見る楽しみの中核にあるのは、「分裂を楽しんでいる落語家を見る」ことだと述べる（第七段落）。本文にはこうある。

「落語を観る観客はそうした自分自身の本来的な分裂を、生き生きとした形で外から眺めて楽しむことができるのである。」

落語家は複数の自律的な他者を演じ分け、機転のきいた会話を展開していく。まるで、自分のなかに複数の他者を持ち、その他者たちが会話を楽しんでいるように演じるのだ。このことを筆者は「生きた対話の運動の心地よさ」（第六段落）とも言っている。この次元でも「生きた」という側面が表れているのである。まとめると、演じている自分とそれを客観的に見ている自分の「生きた対話」と演じている自分の中での複数の自律的な他者との「生きた対話」の二つの側面が「生きた人間」を構成している。

では、そうしたあり方が「患者に希望を与え」るのは何故なのか？

第七段落を読んでほしい。そこにはこう書かれている。「分裂しながらも、ひとりの落語家として生きている人間を見ることに、何か希望のようなものを体験するのである。」

人間の本来的なあり方は分裂的だというのが筆者の考えである。一方で精神分析の患者は分裂的なあり方に悩んでいる。彼ら/彼女らは分析家の患者理解の言葉や物語や解釈に癒されもする。

しかし、傍線部オで筆者は、そうした治療を行う分析家の姿自身も患者にとっては希望となると述べるのである。

落語家が人間の本来的な分裂を演じる。しかし、それは無自覚に行われるものではなく、自分を引いた目で見つめる自覚的な営みとして行っているのである。そしてそうした落語家のあり方に「希望のようなものを体験」するのである。

最後の二行にはこう書かれている。「自分はこころのなかの誰かにただ無自覚にふりまわされ、突き動かされていなくてもいいのかもしれない。ひとりのパーソナルな欲望と思考をもつひとりの人間、自律的な存在でありうるかもしれないのだ」と。つまり、患者はこころの中の誰かに無自覚に振り回され、突き動かされている。それを統御できないがゆえに、悩み、苦しむ。しかしながら、自分のそうした分裂（何度も言うがこれが人間の本来的なあり方であると筆者は述べている）を分析家は自分のうちに引き受けつつも、そこから離れた視点を取り、一つの自律的な人間の下で分析してみせる。そうした本来的な生き生きとした分裂を、「ひとりのパーソナルな欲望と思考を持つ人間」のもとで律することができている分析家のあり方を見て、患者は自分もそうできるのではないかという「希望のようなもの」を感じる。

患者は、自覚的に分裂する他者と生き生き対話し、それをひとりの人間の自律の下に行える分析家に希望を持つのである。

まとめよう。人間は本来的には分裂している。しかし、多くの人はその分裂を錯覚によって、経験しないで済む。精神分析を受診に来る患者は、本来的な分裂を経験し、その上で自らを統御できない状態にある。

精神分析家は、その患者の分裂に同化しつつも、それを引いた目で見ることによって、自らのうちにある分裂した複数の自己-他者に振り回されないことができる。

落語家もまた、複数の分裂した他者を演じながらも、離見の見をもっていして自覚的に行き、対話を楽しむ。この落語家のあり方は、精神分析家と重なるものがあると筆者は述べる。

こうした精神分析家のあり方に、患者は、自らの本来的な分裂を経験してもなお、それを自律的に統一できるということを感じて、希望を感じるのである。

これで回答の骨格は全て整っただろう。まとめて120字以内で説明すれば終了だ。

落語の観客が、演者の中に同居する複数の他者同士の対話を楽しむのと同様、精神分析においては、勝手に交錯する複数の自己に苦しむ患者は、その分裂を俯瞰的に見ることができる分析家の姿に、一つの人格に統合された人間という可能性を見出すから。（115字）

他社解答例

第5問採点基準（最大10点）

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
なぜそういえるのか （構成点）	設問で聞かれていることに答えているか？ なぜそう言えるかの、理由を書いた文章になっている。	文章全体。特に文末表現。～から。	0～2点
落語家との共通性 （読解点）	落語と精神分析の共通点が書かれているか。	落語の観客が、演者の中に同居する複数の他者同士の対話を楽しむのと同様	0～2点
生きた人間としての 分析家自身のあり方 こそ（読解点）	生きた人間としての分析家のあり方がどのようなものか書かれている。	一つの人格に統合された人間	0～2点
患者に希望を与えて もいる（読解点）	精神分析の患者が抱く、希望がどのような点にあるかが書かれている。	勝手に交錯する複数の自己に苦しむ患者は、その分裂を俯瞰的に見ることができる分析家の姿に、一つの人格に統合された人間という可能性を見出す	0～2点
表現点	読みやすい文章になっているか		0～2点

赤本

答案	複数の登場人物に自己を分裂させつつそれを楽しんで演じる落語家の姿が観衆を楽しませるように、患者の分裂した心の世界に同一化しつつも自身の視点に立ち戻る分析家のあり方が、分裂した自己に支配されない自律的な存在になる可能性を患者に見出させるから。（120字）
Schip採点	10点 読解点：6点 構成点：2点 表現点：2点

全ての要素が含まれており、非常にわかりやすい文章も書けている。満点答案ではないだろうか。

東大の現代文25カ年

答案	分裂しながらもひとりの落語家として生きている自らの姿を観客の視点から見る落語家のように、患者の分裂に同化し分裂しつつも自分を別の視点から見られる分析家のあり方が、分裂した自分でもひとりの自律的な存在として生きられる可能性を患者に示すから。（119字）
Schip採点	8点 読解点：4点 構成点：2点 表現点：2点

この文章の主題は、あくまで分裂する落語家/分析家を見る観客/患者の側であるべきなので、「分裂しながらもひとりの落語家として生きている自らの姿を観客の視点から見る落語家のように」としてしまうと、主題が落語の演者の方に移ってしまっていて、後半との対応関係がぼやけてしまう。落語家のそのようなあり方が観客を楽しませているのだということには最低限言及したほうがいいだろう。 よって読解点を2点減点とした。

駿台（青本）

答案	精神分析家は落語家と同様に、文化を内在化してただ一人で他者と対峙し、自己分裂する自分を他者の視点から対象化して語る存在であり、分裂した自己に苦しむ患者は、分裂してもなお分析家として仕事を行う姿に、自律的に生きる回復への可能性を感じとるから。（120字）
Schip採点	6点 読解点：2点 構成点：4点 表現点：0点

「落語家と同様に、文化を内在化してただ一人で他者と対峙し」という点がよくわからない。そのため表現点は0点とした。「落語家と同様に」の点が十分でないため落語家との共通性の読解点は一点減点した。「分裂してもなお分析家として仕事を行う姿に」は「生きた人間としての希望」とは対応関係が微妙であるためここも一点減点した。

河合塾

答案	落語家が、一人の人が様々な人物に分裂しているさまを見せることで観客を楽しませるように、分析家は、分裂した自己に苦しむ患者に対して、患者の分裂を体現しつつそれを見渡す視点を持つ生き方を一人で引き受け、そのさまを患者自身の可能性として示すから。（120字）
Schip採点	10点 読解点：6点 構成点：2点 表現点：2点

この答案も必要な要素が盛り込まれているとともに、文章も主語述語の対応関係や比較も上手く書けていて、素晴らしい答案だ。

東進ハイスクール

答案	自己を分裂させつつ一人の人間として生きる落語家を見て観客が楽しむのと同様、複数の自己に分裂した患者内部と同化して生じた分裂を克服し、自身の視点を回復した分析家を見て患者も、自己を対象化し、自律的な存在として統一性を持つ自己を見出しうるから。（120字）
Schip採点	8点 読解点：4点 構成点：2点 表現点：2点

「自己を分裂させつつ一人の人間として生きる落語家を見て観客が楽しむのと同様に」としている点がよい。前半をこのような文章にすることによって、後半の精神分析家との対応関係がはっきりする。ただし、分裂した患者内部と同化して生じた分裂を「克服」したとまでは読み解けな

い。なぜなら精神分析の基本的な前提は、「人間は本来的に分裂している」ということなのだから。分裂しつつも、それを客観化あるいは対象化できるという点がポイントである。よって読解点は2点減点とする。

スタディサプリ（旺文社）

答案	文化を内在し複数の他者を一人で演じる落語家のように、自己の分裂に苦しむ患者に同化して自らも分裂しつつそれを別の視点から対象化し理解する分析家のあり方は、複数の自己を仮想的に統合しつつ自律的な個として生きる人間存在の本質を患者に示唆するから。（120字）
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：点

「文化を内在し」という言葉が不明確で不明瞭であって、これは傍線部を説明するのに、回答で使われている語句もまた説明しないければ理解してもらえないという設問者へ問いを投げ返しているような回答になっている。設問者への問い返しは、うまく決まればかっこいいかもしれないが、そのようなことはよっぽど自信がない限りやめたほうがいい。また、「複数の自己～生きる人間存在の本質」というのは言い過ぎである。複数の自己を仮想的に統合しつつ自律的な個人として生きることが人間存在の本質だと述べている箇所を文章中から探すことはできない。むしろ本文では人間の本質は分裂していることだと述べられているに留まる。

文化を内在し～という記述が意味不明なので、読解点2点減点かつ表現点も加点できない。「自己の分裂に苦しむ患者に同化して～分析家のあり方」は正しい。しかし、その次の記述が誤っているので、さらに読解点を減点とした。

以上のように各社の模範回答を見てきたが、模範回答が十分信頼に足るものではないことが理解できたのではないだろうか？

それはもちろん我々の回答についても言えることである。

大事なことは、自らが納得した回答を作ることである。その際には、文章中にしっかりと根拠を見つけ出すことを忘れないようにしよう。

文章をどのように読み解くか、書いてあることをどう解釈するかは、人によって差が出る。実際に、我々が回答を作る際にも解釈で揺れた箇所も沢山ある。しかしながら、一人一人の勝手な判断や思い込みを極力避けるために、与えられた文章を丹念に読み込んだ上での解釈である。

解釈の多様性は保証されるべきであるが、その解釈は共通の基盤あってこそその一人一人の解釈である。

しかしながらそのような訓練を学校ではあまり受けていないであろうから、この解説を地図にしつつ、もう一度現場に立ち返ってほしい。

そして現場からくみとれるものをきちんとくみ取る訓練をすれば確実に回答作成力は上がると思われる。

やみくもに演習するのではなく、問題に徹底的に向き合って自分で納得した回答を作るように心がけてほしい。

模範回答があてにならないことは、既に分かったのだから。我々の回答も疑いつつ、さらによりよい答案を皆さんが書いてくれることを期待して、終わりとする。

※他社解答例の採点結果（最高点は32点：漢字書き取りは除く）

	赤本	25力年	駿台	河合塾	東進
設問1	5点	5点	2点	0点	3点
設問2	4点	4点	4点	3点	3点
設問3	0点	0点	5点	1点	2点
設問4	2点	2点	3点	3点	1点
設問5	10点	8点	6点	10点	8点
合計	21点	19点	20点	17点	17点
得点率 (%)	65.6%	59.4%	62.5%	53.1%	53.1%

本文解説

エッセイ型の文章だ。エッセイの本文読解の虎の巻を適用しよう。ただし、虎の巻を利用しながら読解してもなお、本問は主題を問うのが難しいかもしれない。この文章の主題をあえて論じるのであれば、問うことから広がる想像の世界とでも言えるだろうか。

筆者は初対面の人のお話の話題から疑問を持って、その疑問から「想像力の翼」を広げて様々な景色に自由に移動している。作者にとっては問いとは脆い光なのかもしれないがそれは「もっと遠くへ届く光」なのである。この文章は問うということについて、日常の会話の断片の中から考えたエッセイと言えるだろう。エッセイとはフランス語でessai、これは日本語に訳すと「試み」となる。本運は厳密な論理や明快なわかりやすさはないかもしれないが、どこかおかしみと温かみのある、けれども何か重要なことが隠されているようなそんな文章ではないだろうか。じっくり読んで、味わってほしい。

テーマ	体験・観察	解釈
	<p>1、初対面の人との出会い</p> <p>「仕事の打ち合わせでだれかと始めて顔を合わせるとき。そんなときには、互いに、見えない触角を伸ばして話題を探すことになる。」</p>	<p>1、日常にずぶりと差しこまれる体験</p> <p>「自分には思いもよらない事柄を、気に掛けて生きている人がいると知るとは、知らない本のページをめくる瞬間と似ている。」</p>

テーマ	体験・観察	解釈
<p>未知との出会いとそこから生まれる問い、そしてその問いからはじまる未知の探求・想像の世界</p> <p>それは限界づけられてはいるものの問うことによって広がっていくもの</p>	<p>2、植物園の話</p> <p>「台風の後には、植物園に直行するんです。」</p> <p>「その植物園には、いろんな種類の松が植わっていて。台風の後には、こんな大きい松ぼっくりが拾えるんです。」</p>	<p>2、植物園と本の類似性</p> <p>「植物園もまた本に似ている。風が荒々しい手つきでめくれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちてくる。植物園に通うその人のなかにも、未知の本がある。耳を傾ける。生きている本は開かれないときもある。こちらの言葉が多くなれば、きっと開かれない。」</p>
	<p>3、馬の歯の話</p> <p>「あのあたりでは、馬の歯を拾えるんです。（中略）中世に、馬をたくさん飼っていたのでしょう。」</p> <p>「あれは馬です。（略）きっぱり答えた。」</p>	<p>3、「はじめて教えられたことだけが帯びるぼんやりとした明るさの中であって、心ひかれた。」</p> <p>「馬なのかな、馬だったのか、確かめることはできない。」</p> <p>「これはなんだろう、という疑問形がそこにあるということだ。問いだけは確かにあるのだ」</p>
	<p>4、吉原幸子の詩の話</p> <p>「ある日、吉原幸子の詩集『オンディーヌ』を読んでいた。」</p>	<p>4、「あれはなんだったのだろう。そんな風に首を傾げて脳裏の残像をなぞる瞬間は、日常の中にいくつも生まれる。多くのことはあいまいなままきえていく。足元を照らす明確さは、いつでも仮のものなのだ。そして、だからこそ、輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩踏み出すことから、光がこぼれる。」</p> <p>「わかることとわからないことのあいだで、途方に暮れるすがたを刻む。」</p>

本文解説

設問（一）

問題	「日常の中にずぶりと差しこまれる」（傍線部ア）とは、どういうことか、説明せよ。
----	---

解答例

初対面の人との出逢いや対話が、何気なく過ごす毎日のなかに、新鮮な驚き
を突きつけてくるということ。（48字）

構成フェーズ

- ・ 問われているのはどういうことか考えてみよう。
- ・ 回答の方向性を考えてみよう。

読解フェーズ

思考の目次

- ・ 日常とはなにか考えてみよう。日常と非日常の差異はなんだろうか？
- ・ 日常の中にずぶりと差しこまれるとはどういうことだろう？
- ・ すぶりという言葉が持つニュアンスを考えてみよう。
- ・ 差しこまれるという受動態のニュアンスを考えてみよう。

構成フェーズ

設問は、「日常の中にずぶりと差しこまれる」（傍線部ア）がどういうことかと問うている。傍線部アだけでは何を言っているかが具体的ではなく、いわば筆者独特の言い回しがなされている。この筆者の独特な言い回しがどのようなことを言おうとしているのかを、説明しなさいというのがこの問題の問うていることであろう。

問題が問うていることがわかった。次はその問いにどう答えるかの大まかな方針を考えていこう。回答の方向性は傍線部アがどのような事態を言い表してるかを説明すればいいのだから、傍線部アの言葉の内容を具体的に検討していけばいい。まず傍線部アには主語がない。この文章の主語は何かを考えてみよう。前の文に「初対面の人と向き合う時間は」とあるので、これが主語だとわかる。

では、初対面の人と向き合う時間が日常の中に入ってくるとはどういう事態か、それはなにをもたらすのか、そのことを本文を読解しながら考えていこう。

読解フェーズ

みなさんにとって日常とはどのようなものだろうか？学校に行ってたわいもない話をしたり、あるいは部活や勉強に精を出したり（勉強に精を出すのはテスト前の非日常だろうか？笑）、友達と一緒に何の話をするわけでもなく下校したりすることだろうか？

日常とは「なにげない日常」とよくいわれるように、とくに変化もないと感じられ、習慣的に過ごすことができる時間と言ってもいいだろう。

そういう何気ない日常で普段の生活は満たされている。けれども、ふとした瞬間にそんな何気ない日常のリアリティが揺らぐこともあるかもしれない。

例えば、ふと見上げた空の夕焼けがいつもよりも綺麗だったこと、あるいは気になる異性あるいは同性ができたこと、昔からあったお店が潰れてしまったこと、そういう時何気ない日常に何か不思議なものが持ち込まれた感じを覚えた人も多いのではないだろうか。そういう体験は非日常的な体験と言っていいのではないだろうか。

筆者にとっては、おそらく多くの人にとっても、初対面の人と出会うことは日常的な体験ではない。相手がどういう話題を振ってくるのかわからない。気心がしれた友人と会うときとは異なる緊張感がある。けれども初対面の人との話が盛り上がると、なにか普段の会話では体感できない楽しさや充実感を得られたりする。それは日常の惰性を超えていくものだからなのかもしれない。つまり、日常というある種の変わらない風景が一変して、新しい風景が見えたことによる高揚感なのではないか。

筆者は「自分には思いもよらない事柄を、気に掛けて生きている人がいると知るとは、知らない本のページをめくる瞬間と似ている。」と述べる。

初対面の人との出会いやその人との対話は、日常にそうした非日常的なものを持ち込む。これが「日常に差しこまれる」ということで筆者が言い表そうとしていることなのではないか。ここまででだいたい回答の大枠は決まる。

さらに進んで、「ずぶり」という言葉が持つニュアンスを考えていこう。

「すぶり」という言葉は、柔らかく弾力性のないものに刺さるというニュアンスを持つ。「ぶさり」は柔らかく弾力性のあるもの。固いものには「ぐさり」が好んで使われるらしい。「ずぶり」は「ずぶりとぬかるみにはまり込む」などのイメージがぴったりではないか？

本文では初対面の人と話すことが「日常にずぶりと差しこまれる」と述べている。

初対面の人と話すことは疲れる。相手がどのような人かもわからないし、どういう話題をしていいかもわからない。場合によっては少し沈痛で陰鬱な気分になる。知っている人とたわいもない会話をするのが日常としたら、初対面の人と話すのは非日常のことだ。

そうした非日常が日常に「ずぶり」と差しこまれるのだ。そしてその非日常は向こうのほうからやってくる。相手がどういう人なのかもわからない。もっと言うといつ誰と初対面するかもわからない。初対面という非日常は向こうからやってくるのだ。

これが受動態のイメージではないだろうか。では、そのような非日常が「ずぶり差しこまれる」ことで何が起こるのだろうか。それは日常に何かしらの変化が生じるということだ。しかもそれ

は、「ずぶり」という言葉の持つイメージのようなゆっくりゆっくりと確実に変化をもたらすのだ。筆者はその変化の中で様々な問いを見つけ、想像を膨らませていくのだ。

以下の回答例も参考に自分なりに回答を考えてみよう。

初対面の人との出逢いや対話が、何気なく過ごす毎日のなかに、新鮮な驚きをじわじわとしかし確実に突きつけてくるということ。(48字)

他社解答例

赤本

答案	既知のものに囲まれた日常に、初対面の人と話す時間が割り込んできて、新たな見方を知る機会となるということ。(52字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「新たな見方を知る機会となること」と書いてあるが、何が新たな機会になるのかが書かれておらず、文章が成立していないような印象を与える。しっかりと文章が成立するように文章を書くように意識しよう。また、「日常の中にずぶりと差し込む」とはどういうことかと聞かれているので、「新たな見方を知る機会になるということ」と結んでは、問いに対する答えとしては弱いと考えた。よって読解点、構成点を一点減点した。

東大の現代文25カ年

答案	同じことが繰り返される日常の中に、初対面の人と話す機会がイレギュラーに訪れ、新鮮な話題が深い印象をもたらすということ。(59字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

同じことが繰り返されるというのはやや言い過ぎの感がある。そのために読解点を一点減点した。ただ回答の方向性と内容はよいのではないかと思う。

駿台（青本）

答案	初対面の人と語り合う時間は、自分が当たり前と思い込んでいた日常の世界を不意に揺るがす、新たな驚きをもたらすということ。(59字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

この答案はよくできていると言える。

河合塾

答案	初対面の人から、その人が独自の関心を抱く話を聞くという体験は、漠然と馴染んできた生活の中で突然起こり、聞く側に新鮮な発見をもたらすということ。(71字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

この回答はよいのではないかと思う。字数が多いため、表現点は0点となっている。

東進ハイスクール

答案	初対面の人と話すうちに、思いもよらない事柄に関心を持つ人の存在を知り、ありふれた日常の中にいきなり異質な世界が立ち現れ、はっとさせられるということ。(74字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

この回答もよいと思うが、もう少しすっきりさせられる部分もあるのではないだろうか。あまりにも接続が多すぎると、文意がぼやけることが多いので注意が必要だ。

スタディサプリ (旺文社)

答案	初対面の人と話していると、思いがけない話に出くわして、その衝撃が心に刻まれ自明の世界が揺るがされるということがあるということ。(63字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

「自明の世界が揺るがされる」とまで言うてしまうのは、言い過ぎの感があるし、それで回答を終えているのは拡大解釈をしすぎなのではないかと思う。そこで読解点を一点減点した。

設問 (二)

問題	「風が荒々しい手つきでめくれば、新たなページが開かれて、見知らぬ言葉が落ちている。」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
解答例	本のページをめくり未知の言葉と出会うように、台風一過の植物園では、台風によってもたらされた未知のものに出会えるということ。(59字)

構成フェーズ

- ・ なにが問われているか考えてみよう
- ・ 回答の方向性を考えてみよう

読解フェーズ

思考の目次

- ・ 風が荒々しい手つきで新たなページをめくるとはどのような比喻だろう
- ・ 見知らぬ言葉が落ちているとはどのような比喻だろうか？
- ・ どうして本に喩えているのだろうか？

構成フェーズ

傍線部イは比喻である。この問題で問われているのは比喻で彩られた文章がなにを言いたいのか、どのようなことを言うために比喻を使っているのか理解しているかが問われている。そこで回答の方向性としては、比喻を言い換えて傍線部イの文章が言いたいことを表すということに決まる。つまり、「風が荒々しい手つきで新たなページをめくる」とはどういうことか？と「見知らぬ言葉が落ちている」とはどういうことか？を考えていけばいい。

読解フェーズ

傍線部の直前に、「『台風の後には、植物園に直行するんです。』」という言葉がある。そこで、「風が荒々しい手つき」というのは台風のことでとわかる。では新たなページをめくるとはどういうことだろうか？

『台風の後には、こんなに大きな松ぼっくりが拾えるんです。』という文章もある。そこで、新たなページをめくるとは、台風によって松ぼっくりが下に落ちてくることの比喻であることが推測される。

ではどうして筆者は台風と本とのイメージを重ねたのだろうか？

みなさんにとって本はどんな存在だろうか？時間を埋めるための道具だろうか？あるいは娯楽だろうか？それとも人生の指針だろうか？

筆者にとっては本とは見知らぬ言葉に出会うためのきっかけなのかもしれない。それは未知との出会いであり、向こうからやってくるものなのである。筆者は「生きている本は開かれないときもある。こちらの言葉が多くなれば、きっと開かれない。」と述べる。自分から多くを語るのではなく、向こうからやってくる言葉に耳をすます。向こうからやってくる未知の言葉にハッと驚くこともある。それは「生きている本」と筆者が述べるように、“本”だけから起こる体験では

なく、日常のあらゆる場面で起こる体験なのだ。本のイメージと植物園のイメージを重ねたことで紡がれる詩的なイメージ。そのイメージは「馬の歯」という言葉をめぐってさらに膨らんでいく。それは次の問題の話だ。

まとめよう。台風によって松の木から落ちた大きな松ぼっくり。それは、未知との出会いである。まるで本のページをめくった瞬間に出会う未知の言葉のように。しかし、本を漫然と読んでいてもなにも入ってこないように、注意深く傾聴の姿勢を観察しないと松ぼっくりには出会えない。しかし、向こうからやってくる“言葉”に耳を傾けると、未知のもの、新たな発見に出会うのだ。

まとめよう「風が荒々しい手つきでめくれば」とは台風のことである。そして「新しいページが開かれ、見知らぬ言葉が落ちている」とは、台風によって見たこともない松ぼっくりが地面に落とされることである。それは、本の次のページを開いて、今までは見たこともないような新しい発見に出会ったことに似ている。これらをうまくまとめれば回答が書けるだろう。

他社解答例

赤本

答案	知らない本のページをめくる瞬間のように、台風一過の植物園ではたくさんの意外な発見に出会えるということ。(51字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

無難な回答であろう。内容・方向性ともにとっつきやすい参考にしやすい回答ではないだろうか。

東大の現代文25カ年

答案	台風の直後の植物園では、強風によってもたらされた、普段の植物園では見られない未知なものに出会うことができるということ。(59字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

傍線部には「ページ」「言葉」という明らかに本のイメージに由来する比喻表現があるので、本についての記述も必要である。よって構成点を減点した。

駿台（青本）

答案	ふとしたきっかけが、これまでは見えなかった世界を開き、現実の自然や人間に潜む未知の言葉を顕在化させるということ。(56字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：1点

少し抽象化しすぎである。言いたいことはわかるし、優れた答案ではあるが、比喩の言い換えはあった方がいいのではないかと思う。よって構成点を一点減点した。しかし、全て抽象化して書いた点は他の予備校の回答とは異なっていて、特徴的である。（最初は我々の回答もこの立場だったが、比喩の言い換えは最低限した方がいいだろうということで、現在のような回答になった。第4問は比喩の言い換えの塩梅が難しいだろうが、この答案ももしかしたら満点をもらえるかもしれない。）

河合塾

答案	ページをめくると未知の事柄が現れる本と同様、強風にさらされた後の植物園では、思いがけない未知の様相が現れ、新たな知見がもたらされるということ。(71字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

様相とはありさまや状態のことである。

ただ、難しくしないで、「未知の様相が現れ」ではなく「未知の事柄に出会い」とくらいにすればいいだろう。

単語は自分が使い慣れているものを使えばいい。無理に難しい言葉を使おうとして、意味を深く理解していない言葉を使うのは危険である。注意しよう。

回答の方向性はこれでいいと思われる。

東進ハイスクール

答案	台風の吹き荒れた後の植物園では、暴風によって落下した様々な果実や種子などを手に入れることができ、新たに思いもよらない事柄を知ることができるということ。(75字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

東大の現代文25カ年の解答についての講評でも述べた通り、傍線部には「ページ」「言葉」という明らかに本のイメージに由来する比喩表現があるので、本についても言及しなければならない。この点で構成点を減点した。

スタディサプリ（旺文社）

答案	平穏な日常的世界であっても平生とは異なった事態が生じると、見慣れない世界が立ち現れ、新たな認識をもたらしてくれることがあるということ。（67字）
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

ここではやはり、比喩にきちんと答えた方がいい。これでは抽象的すぎる。この点で構成点は減点される。

比喩は明らかに植物園での話なので、それについて言及がないというのは問題に答えていないに等しいのではないだろうか。「平穏な日常的世界であっても平生とは異なった事態が生じると」という意味も不明確であり、矛盾している文章だと捉えられてもおかしくない。これでは本文が読解できているのかも不明瞭である。読解点も減点される。

設問（三）

問題	「その一步は消えていく光」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	曖昧なことを言葉で明確化しようと問うても、常に仮の輪郭しか得られないが、その営みによってしか新しい発見はもたらされないということ。（66字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なにが問われているか考えよう。 ・ 回答の方針を決めよう。 <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ その一步とはどのような一步だろうか？ ・ 消えていく光とはどのようなイメージだろうか？ ・ どうして光は消えていくものなのだろうか？

構成フェーズ

ここでも問われているのは、傍線部ウの比喩がどのようなことを言うために用いられているかを考えるということである。そこで今回も比喩を具体的に形で言い直すこと、そしてそれがどのようなことを言おうとしているのかを考えていけばいい。

読解フェーズ

「その一步」とは、傍線部の前文に「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一步を踏み出すこと」とあることから、「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えよう」とする一步のことだとわかる。輪郭の曖昧な物事というと「あれは、なんだったんだろう」と日常で思い出すことである。「虹」という詩においては「ぶた」である。電車の車窓からチラッと見えた「ぶた」。

見た瞬間は明快に「ぶた」だと思った。しかし、過ぎ去ってみると「あれは たしかにぶただったろうか」とおぼつかなくなるのだ。ある時には確信したものも時間が経って見るとそれが本当にあったことなのか、あの時の自分は見間違いをしていないかと不安になることがある。この世のあらゆるものは疑いうるのだ。これをデカルト的懷疑と呼んだりする。つまり、「足元を照らす明確さは常に仮のものなのだ。」

「消えていく光」とはそのように、仮の明確さを表していると考えられるのではないだろうか？ 日常の曖昧なことに輪郭を与えるのは光である。我々は光なしには物事を認識できない。しかし、その光は常に仮のものであり、またおぼつかない。それでも、いやそれだからこそ物事を明確にしようと光を投じる。それは消えていくと宿命づけられていたとしても、である。光が消えていくのはなぜだろう。それは人間の認識の限界から来るのだろうか。時間は流れて止まらない。電車の速さで見た「ぶた」はすぐに視界から消えてしまう。「ぶた」という記憶が残るだけである。しかし記憶は心もとない。記憶違いなんてよくあることだ。しかし、あえて「あれは ぶただったろうか」と問うてみる。そのことで「輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えよう」という問いをきっかけに想像が広がり、日常が異なるように見え始める。しかしその問いは常に曖昧で仮のものでしかない。それだからこそ、「一步踏み出すことから光がこぼれる」のである。けれどもまたそのこぼれた光から物事の輪郭が垣間見える。そのようにして、一步踏み出し続けることで何かが立ち現れてこないだろうか？

「ぶただったろうか」と問うことで、「ぶた」とそして「ぶた」以外の何かが思考に現れてくる。

しかし永遠に輪郭の全体を理解しえないということを宿命づけられてまで問うことはどのようなことなのだろうか。詩の最後は「わかることとわからないことのあいだで、途方にくれる姿を刻む」イメージを与える。「確かめられないことで埋もれている日々にかかる虹はどんなだろう。」ぜひ想像してみてほしい。

最後に、傍線部が体現で終わっていることについて考えてみたい。体言で終わっていれば、体言で終わるように書けと習う人もいるかもしれない。

つまり傍線部を分かりやすく言い換えろということだ。

しかし、どういうことか？問われているのであるから、筆者の主張も十分に精査した上で、筆者の言わんとすることを代弁（represent）しなければならない。

前置きが長くなったが、本題に入ろう。ここでは体言で終わっているが、その言葉を筆者がどういう意図でそしてどのような主張の文脈の中で使っているかを十分に踏まえた上で、筆者の言わんとしていることを再現すればよい。再現の精度はひとまず気にしなくてよい。丹念に文章を

コラム：RepresentとPresence

representとは英語でも習っているかもしれないが、重要な概念であり多義的に用いられることが多い。

代弁、代弁、絵を描く、象徴するなどなどである。しかしどれもpresence（originalなもの）を再び（re）この世にもたらしという意味で通じているのである。議会の代表も市井の人々の声（presence）を代表あるいは代弁する（represent）。

画家は頭の中にあるイメージや神話の物語や風景や人物といった具象物（presence）をこの世に絵という手段を持って出現（represent）させる。

これらは何がしかの存在（presence）を反復して再び（re）よびおこす（present）ということに通じ合っている。

現代文もまたその作業である。現代文とは、筆者の言葉（presence）を受験生に代弁-再現前（represent）させる営みなのである。

すなわち単なる言い換えや文章中の言葉の切り張りでは不十分であるのだ。筆者の言わんとすることを考えた上で、答案にrepresentすること。「どういうことか？」という問題は、「お前は筆者が文章中で書いてることをどう読み取り、どうやって構築し直して、限られた枠内に再現するのだ？」と問われていると考えたほうが良いだろう。多少の読み違いや再現のクオリティが低かったとしても、文章中の言葉の切り張りや単なる言い換え（そのような答案は得てして読みづらい）よりは、しっかり筆者の考えを読み取った上で自分なりの表現をしている答案のほうが印象はよいだろう。

このようなrepresentがしっかりできること。それが二次試験で記述問題を課せられるレベルの位置にいる受験生に求められていることなのであろう。

しっかり練習してほしい。

読み込んでいこう。そして自分の言葉でまとめる訓練をしよう。解答例や先生の作った模範解答を眺めて、自分の解答をちょこちょこ直すような作業はやめよう。そんなrepresentのレベルでの作業で復習したり、自己採点をして一喜一憂するのは捨て置こう。まず目を向けるべきは目の前に開かれているテキスト（presence）なのだから。

筆者の言わんとしていることは構成フェーズで考えたとおりである。再び構成フェーズを頼りにしながら文章を読んでいこう。そして、解答例や解説を眺めているだけでなく、実際に解答を作ってみよう。

もし、私たちの解答に不十分なところやケチをつけたいところがあれば、指摘してくれてもいいし、解説を批判してくれたっていい。しかし、テキストをなるべく忠実に読んだ上での話であるが。

大学受験を終えた後は高校とは比べようもない膨大なテキストに埋もれた空間に身を晒すようになる。

そうなった時に現代文にしっかりと向き合ってきた人とそうでない人では天と地ほどの差があるだろう。そして、大学ではテキストを忠実に読み取ることのその先を求められる。そのテキストをどう読み取り、そのテキストの不十分さを補いつつ、知の体系の中に自らに由来のある（original）一石を投じていくことが求められる。採点はされないの自由で思考を羽ばたかせることもあえて誤読を試してみることも許される。しかし、その作業はあくまでも一旦テキストを忠実に読み取ることを経験していなければ、くだらないものにしかない。

ピカソだって写実的な絵を描かせてもまた上手に描けたのだから。今の勉強がつまらないように感じていても、避けては通れない局面であり、その先に、その先にこそ、学ぶことの面白さも待っていることを期待しつつ最後の問題に入っていこう。

他社解答例

赤本

答案	その意味や正体が曖昧なまま気になっている事柄は、一瞬わかりかけてもまた曖昧なまま消えていくということ。（51字）			
Schip採点	5点	読解点：2点	構成点：2点	表現点：1点

「消えていく光」を結局は消えていくものと捉えるか、それともその消えていく光がまたその先を照らし出し、さらに次なる光をもたらすのかに関しては解釈の揺れる点であるし、文章中からどちらが確実かは明確に引き出すことはできない。

確かに、筆者は「足元を照らす明確さは、いつでも仮のものなのだ。そして、だからこそ、輪郭の曖昧な物事に輪郭を与えようと一歩み出すことから、光がこぼれる。」と言っている。

その一方で「問いによって、あらゆるものに近づくことができる。だから、問いとは弱さかもしれないけれど、同時に、もっとも遠くへ届く光なのだろう。」とも言っている。

ここでは、「その一歩は消えていく光」とはどういうことか？と聞かれているので、確かに前半だけを答えてもいいかもしれないが、その一歩は消えていくにしろやはり光なのである。そこまで踏まえて、その光がさらにその先を照らし出し～というところまで含めるか含めないかは、解釈の問題かもしれない。

この回答は「一瞬わかりかけても曖昧なまま消えていくということ」という落ち着いた方をしている。これも一つの方向性ではないかと思う。

ただし、この回答は全体的に消えていくの説明であって、光についての説明は薄いことは指摘しても良いだろう。

東大の現代文25カ年

答案	確かな認識や理解を得ようと疑問に思うことで答えが明確にわかるわけではないが、答えに近づく可能性を含んでいるということ。(59字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

この回答は、光についても説明しようと心がけている。それは、「答えに近づく可能性を含んでいる」という文言から読み取れる。

消えていくが、物事を照らし出し、それが何かわかるような”可能性”を秘めている、そんな光のニュアンスを出しても良いのではないかと思う。我々の回答はこの解答例に近いものとなっている。

ぜひ、この点に関してはみなさんにも自分で考えてもらいたい。

駿台（青本）

答案	より確かな認識を問う営みは、未知の事柄を垣間見たときの新鮮な驚きを、束の間の認識として消し去っていくということ。(56字)
Schip採点	1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

この答案は、消し去っていくで終わらせている。ただし、「より確かな認識を問う営み」が「未知の事柄を垣間見た時の新鮮な驚きを」、「束の間の認識として消し去っていく」ことがこの回答のポイントではない。曖昧なものの輪郭が明確になったと思えども、常にそれは仮のものでし

かないという趣旨のことを筆者は言っている。そのことは、人間に条件づけられていることのように語っている。「より確かな認識を問う営み」が、「新鮮な驚き」を、「束の間の認識として消し去っていく」のではない。それは、自ずと消えていってしまうのだ。また新鮮な驚きが消えるのではない。消えるのは物事の明確さなのだ。物事の明確さは、一瞬それが明確だと思っても、消えてしまうことを筆者は「虹」という詩からも見出している。この答案はそのことに触れておらず、読解も誤っている。そのため読解点は0点とした。また、関連して傍線部の言い換えも一部できていないので構成点は1点とした。

河合塾

答案	日常の中で曖昧なまま消えていくものを明確化する行為は、常に仮象をもたらすものでしかありえないが、そうした営みが次の問いへとつながること。 (68字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

仮象という単語は手垢の付きすぎている単語であって、あまり使わないほうがいい。

仮象というのは簡単に言ってしまうと、それ自体は現実（的）でないが、現実（的）なような見せかけのことである。

筆者が「曖昧なもの」と呼んでいるものを仮象と呼んでいいのかはこれはおそらく論争的な問題である。

ここでは深く立ち入らないが、何れにせよ仮象という言葉を用いるのは好ましくない。難しい言葉を使えば、いい回答であるような誤解は捨てたほうがいい。レベルIの勇者で、ラスボスは倒せないのだから。

自分の勉強量（受験勉強だけでない）に相当の自信を持っている方は、勝負していただきたいが、そうでないならば自分の背丈にあった仕方に対処したほうがいい。

回答の方向性はよいと思うが、仮象という言葉は用いないほうがいいだろう。

東進ハイスクール

答案	日常の中に表れる様々な曖昧な物事を明確に理解しようと脳裡のイメージを探っても、一瞬わかったような気がするだけで、結局は曖昧なまま忘れ去られるということ。（or 一瞬わかったような気はするが、結局わからないことだけがはっきりしている）（76字or74字）
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

これもまた赤本と同様の議論である。

答案	日常での疑問に答えを見つけようとしても、ほとんどが達成されず忘れされていくが、問いかけ続けること自体には大きな意味があるということ。（66字）
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

「問いかけ続けること自体には大きな意味があるということ」そうなのかもしれないが、「その一歩は消えていく光」とはどういうことか？と聞かれていて、このように答えるのは多少アクロバティックな印象を与える。 よって構成点を一点減点した。

内容的にはいいだろうが、回答の方向性に関しては疑問のつく回答である。

設問（四）

問題	「掌にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	未知を求めて問う営みは、文字によってだけではなく、手に取ったものから広げていった想像によってもなされるうということ。（59字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なにが問われているか考えよう ・ 回答の方針を決めよう <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 掌にのせるとは何を掌にのせているのだろうか？ ・ 文字のない詩とはなんだろうか？ <p>+α</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 上記の解答例が優れているか考えてみよう。

構成フェーズ

これも「掌にのせて」、「文字のない詩」という文章で表されているものがどのようなことを言っていて、 それを通して筆者がなにを伝えたいかが問われている。 よって回答の方針としては、

掌にのせて文字ない詩を読むという行為を具体的な言葉で表して、それによって筆者がなにを伝えたいのかについて述べていけばいいだろう。

読解フェーズ

掌にのせているのは、松ぼっくりや馬の歯である。「掌に乗せて文字のない詩を読む」人とは筆者が初対面で出会った話し相手のことである。その人は、台風の後には植物園に直行し、大きな松ぼっくりを拾っては楽しむ。その人はまた、海岸で拾った「馬の歯」（本当に馬の歯なのかかわからないが）を自慢げに筆者に見せる。その「馬の歯」は中世の人が飼っていた馬のものだろうという推測までする。筆者はその人の話を「もっと聞きたい」と思うのである。筆者にとって詩とはおそらく未知の言葉との出会いである。そしてその人の話は筆者にとって未知の言葉であったと同時に筆者に問いをもたらしただろう。その問いから筆者は「ほんとうに馬なのだろうか」、馬だったとしたら「誰に飼われていたものだろうか」「どんな毛の色だったか」「人に乗せていただろうか」「荷物を運んだのだろうか」などと連想を広げるが、これらのことで「わかることはなにもない」。ただただ「これはなんだろう」という疑問があるだけなのだ。確実にあるのは問いだけである。そしてその問いを頼りに筆者は想像を広げて、輪郭な曖昧な物事に輪郭を与えていくのだ。

このように筆者はその人の話に傾聴することで、未知の言葉に出会い、問いというこぼれゆく光にも似た一歩を踏み出していく。これはまさに「虹」という詩を前にした筆者の体験と同じものである。

「文字のない詩」とは、「虹」という文字のある詩のように、連想を広げてくれる営みのことだ。連想を広げてくれる詩とは、文字がなくても成立する。「馬の歯」であっても「松ぼっくり」であっても、そこから問うことを始め、未知のものへと想像を広げて行く営みがあれば、それは詩足りうるのである。

ここまできたらもう文字のない詩を読むとはどういうことかわかるのではないだろうか。じっくり自分で考えてみてほしい。

解答例は以下ようになる。

未知を求めて問う営みは、文字によってだけでなく、手にとったものから広げていった想像によってもなされうるということ。（59字）

これを読んだみなさんも、このように色々な物事に耳を傾けてみて、その物事から聞こえてくる声に耳をすませてみると、日常に未知のものが「ずぶり」と差しこまれ、そこから新たな発見を得られるそんな体験を持てるのではないだろうか。

コラム：人間に確実なことはわかるの？

「人間に確実なことってわかるの？」という問いは遙か昔から、人々を惹きつけてきた。みなさんは、どう思われるだろうか。確実なこと（真理と言い換えられる）を人間は掴みうるか否か。これは重要な問題である。確実なことをつかむことができれば心強い。なぜなら確実なことに対しては誤りはないからだ。例えば、彼/彼女が確実に自分のことを好きだと思っていれば、何の苦労もないだろう。あるいは、政府が英語教育を充実させれば、日本人の英語は確実に上がると分かればそれに異論を唱える人も少なくなるだろう。「確実さ」は人間を安心させるのだ。しかしながらその確実さを人間は把握できるのか？

一神教の世界においては、神の全能さは確かである。そしてその神がこの世を適切な形で作りなされた。それに対して神の言いつけを破った人間は不完全である（禁断の果実）。そんな人間は確実なものに至れるのか否か。至られるのであればそれは、学問を積むことか、それとも修行をすることか、あるいは神秘的な体験をすることか。何れにせよ、確実なものがあることは前提とされていた。しかしながら、近代精神（科学）の発達とともに、神の存在さえも否定された。それに変わって、科学が信仰の対象になっている。科学的に実証されたと言われれば、効果があると思ってしまう。しかしよく考えてみよう。たかだか数万回の実験（帰納法）で確実だと言えるのだろうか？数万回に効果があっても、数万|回目に効果がないかもしれない。あるいはドリカムの歌詞のように「|万回ダメでへとへとになっても、|万|回目は何か変わるかもしれない」と希望を持つこともできる。このように世のあらゆることは疑うことが可能だ。デカルトはその先に、「我思う、故に我あり」と言った。

究極的に確実なものがない（全能の神はいない、科学は疑いを持つことが可能でありその態度こそ科学的でもある）中で、人間に何か「確実なもの」は捉えられるのだろうか？筆者は、一瞬わかったとしても、曖昧なまま消えていくと知っている。しかしそれは問うことによって、近づくことはできるのではないだろうかとも知っている。完全に把握できなくても、近づくことはできるのではないか。それが筆者の考えてることだといってしまったら、穿ち過ぎであろうか。

いずれにせよ、人間は何か確実なことがわかるのだろうか。そもそも確実なこととは何か。その問いは未だに結末を迎えていない。しかしながらこの問いは人間のあり方、あるいは根本的な人間観、さらには社会観まで通じてしまう。確実なことがわかるのだとしたら、失敗はどうして起こってしまうのか。検証不足なのか、勉強不足なのか、情報不足なのか。

確実なことがわからないのだとしたら、私たちの生活はどうして秩序づけられているのだろうか。あるいは秩序づけられるのだろうか。何を基準に生きればいいのか。

みなさんはどう思われるだろうか。ぜひ考えてみてほしい。

ところで、これは設問解説としては横道にそれるが、解答例を疑ってみることも必要である。それは設問(三)の芸術フェーズでも考えたことである。この文章の解説を終えるに当たって、ぜひ考えて欲しいことがある。それが、「未知を求めて問う営みは、文字によってだけではなく、手にとったものから広げた想像によってもなされうるということ。」という私たちが用意した解答の講評を行うということである。もし優れているのであれば、どのような点が優れていると思うか、もしそうでないならばどのような点が欠けていると思うか。考えて欲しい。

予備校などの用意した解答案を見る際も同様に友人などと講評してみるのも面白いかもしれない。

この答案のこのような点が優れているあるいはこのような点が欠けている。このような視点があつたら更に良くなるなど友人と語り合ってみると、案外新たな発見を得たり、足りていない知識を痛感したりできるのではないだろうか。その方が記憶も長く続くかもしれない。

ということで、この答案についてもぜひ考えてみたり、語り合ったりしてみしてほしい。

ただし、印象だけでなくしっかりと文章を読み、足りていない知識があるならば補った上で、考えたり、語り合ったりすることが肝要であることは繰り返しておく。

他社解答例

赤本

答案	ささやかな事物に興味を持ち、豊かな想像力によって見知らぬ自然や歴史へ思いを巡らせる人もいるということ。(51字)			
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：1点	表現点：1点

見知らぬ自然や歴史へと思いを巡らせることだけが、詩人なのであろうか。曖昧なものすべてに対して、その曖昧なもの何かを垣間見せてくれるそのような存在を詩人と言っているのではないだろうか。そうであると、見知らぬ自然や歴史というのは限定しすぎの感がある。また、「掌にのせて」ということもうまく表現できていない。よって構成点と読解点を一点減点した。

東大の現代文25カ年

答案	普通の人に興味を持たないものについて嬉々として語り、こちらの想像力を掻き立てて、問いを呼び起こさせる人がいるということ。(60字)			
Schip採点	3点	読解点：1点	構成点：1点	表現点：1点

「普通の人に興味を持たないものについて嬉々として語り」という文が必要かどうか疑わしい。それよりも、「掌にのせて、そんな詩を読む人がある」とはどういうことかについて述べたほうがいい。 よって構成点を減点した。

また、この答えは「文字のない詩」とは何かについても十分に説明していない。よって読解点も減点した。

駿台（青本）

答案	未知への想像力をもって問い続けることで、現実の自然や人間は不思議な魅惑に満ちた詩の世界として立ち現れてくるということ。(59字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：1点

この答えは、比喩の言い換えをしていない。この点は設問（2）と同様である。この回答もいいだろうが、比喩の言い換えはした方がいいのではないだろうか。よって構成点を一点減点とする。「現実の自然や人間が不思議な魅惑に満ちた詩の世界として立ち現れてくる」という点も、わからなくはないが、本文から確かな根拠をもって読み取るのは困難である。よって読解点も原点とした。

河合塾

答案	珍しく意味ありげな事物を手にしてさまざまな疑問を抱くことで、言葉に拠らずに豊かな想像力の世界を広げる人もいるということ。(60字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

「珍しく意味ありげな事物を手にして」と限定されるのかが不明である。また言葉によらずにというのも不明である。

筆者は文字ない詩と言っているだけで、言葉のないとは言っていない。実際に初対面であった人は、話し言葉で事物から想像力を広げて語っている。

言葉に拠らずにというのは文字に拠らずにというのは、全く異なることである。文字とはいま、皆さんが見ているような記号である。当然、書き言葉（文字）ではない話し言葉（音声）も存在する。それも否定して、言葉に拠らずと書いてしまうのよろしくない。よって読解点を減点した。

東進ハイスクール

答案	ありふれた日常の中で、よくわからないものに対して虚心で何だろうと問いかけることで、日常とはかけ離れた豊かな世界を想像力によって広げる人もいるということ。(76字)
----	---

Schip採点	2点	読解点：2点	構成点：1点	表現点：-1点
---------	----	--------	--------	---------

この回答は、掌にのせて詩を読むことがどういうことなのかについての説明が曖昧である。

作中で引用される詩人と類比する形で、初対面で出会った印象的な人について筆者は語っているのである。筆者にとって詩がどういう存在なのか、そして初対面で出会ったその人の語った内容と詩がどのようにリンクしているのかについては述べられてはいるが、では「掌にのせて」ということのニュアンスはどこで出しているのかというと曖昧である。このことについても述べなければならないだろう。 よって構成点を減点した。また、字数が75字以上と多いため表現点を-1点とした。

スタディサプリ（旺文社）

答案	他の人が気につけないような事柄に注意をそそぎ、問いを発し想像力を広げることで日常を超え出た世界を感じ取ることに、詩の意義があるということ。 (69字)
----	--

Schip採点	1点	読解点：1点	構成点：0点	表現点：0点
---------	----	--------	--------	--------

「詩の意義があるということ」ということもまたアクロバティックな印象を与える。またこの文章では、問いに対して明確に答えていることにはならない。問いは「掌にのせて、文字のないそんな詩を読む人もいる」とはどういうことか？である。

それに対して、「詩の意義があるということ」という回答は変ではないだろうか。聞かれていることに対してどう答えるのかについても意識してほしい。 回答の答え方が間違っているので、構成点は0点とした。